

秋の魔法

——ひとつのメルヒェン——

ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ

島浦 一博 訳

騎士ウバルドは、ある晴れた秋の夕べ、狩りの最中に連れの者たちと遠くはぐれてしまい、樹木のうつそうとした寂しい山間^{やまあい}を馬で進んでいた。そのとき、風変わりではな衣服に身を包んだ男が山から下りてくるのが目に入った。その見知らぬ男はウバルドに気づかず、すぐ傍まできて歩みをとめた。ウバルドは不思議そうに眺めた。この男はとても上品で立派な装飾の施された短上衣^{ダブリット}を着ているが、それは長い歳月を経てくたびれ、すっかり流行遅れになっている。男は美男子であつたが、顔は青白く、ぼさぼさのひげに覆われていた。

二人は驚いて互いに挨拶を交わした。運悪く、道に迷つてしまつて、とウバルドは話を切り出した。日はすでに山の陰に隠れてしまいました、こんな場所まで来てしまうと、近くにはもう民家はひとつも見当らないのでしょうか。男はそれを聞いて、今夜はうちに泊つていきなさい、そうすれば明日、朝一番にこの山から出られるただ一つの道に案内しましょう、とウバルドに申し出た。ウバルドは喜んでその申し出を受け入れ、男の後についてごつごつした山

の隘路^{あいろ}を進んでいった。

まもなく二人は巨大な岩の前にたどり着いた。その岩の裾には穴が穿たれ、広々とした空間が作られていた。この岩屋の中央には大きな石があり、その上に木製のキリスト十字架像が立ててあった。そして奥まった場所は、乾いた木の葉を敷きつめた寝床になっていた。ウバルドが入口に馬をつないでいると、その間に岩屋の主は黙ってワインとパンを運んできた。二人は共に腰を下ろした。男の服装が隠遁生活をする者にはあまりふさわしいと思われなかった。騎士は、過去の宿運について男に聞かずにはいられなかった。

「私が何者であるかは詮索しなくてもいい」と岩屋の主は厳しい口調で言うと、とたんに陰気で無愛想な顔になった。そうかと思えば、ウバルドが若いころに成し遂げた幾度かの旅や嗜れがましい功績について自ら話し始めると、岩屋の主が熱心に耳を傾け、それから深い物思いに沈むのをウバルドは見逃さなかった。とうとう疲れてしまったウバルドは、男が勧めてくれた木の葉の寝床に体を伸ばすと、すぐに眠りに落ちた。主のほうは、岩屋の入り口に腰を下ろした。

真夜中、不安な夢にぎよつとして騎士は身を起こした。月が静まりかえった山間を皓々と照らしていた。表に目をやると、男が背の高いゆらゆら揺れる木々の間を落ち着かない様子で歩き回っていた。そして歩きながらうつろな声で歌をうたっていた。ウバルドにはときれときれにしか聞き取れなかったが、その歌詞はおおよそ次のようであった。

恐れる心は私をこの山間から追い立てるのに、

古い響きが私を捉えて離さない――

甘き罪よ、解き放つておくれ！

さもなくば、わたしを打ち倒して、

この歌の魔力から私を隠し、

大地の懷に匿っておくれ！

神よ！ 私は全身全霊で祈りたいのです、

しかし世俗の諸々の形象が

いつもあなたと私の間に割り込み、

そして周りの森のざわめきが

私の魂を恐怖で満たすのです、

厳格な神よ！ 私はあなたが怖い。

ああ！ 私の鎖も断ち切りたまえ！

人類を救済するために、

あなたはつらい死へ赴かれたのですから。

地獄の門の前をあてもなくさまよいながら、

ああ、私は今にも死んでしまいそう。

イエスよ、困っている私を助けたまえ！

男は再び口を閉ざし、石の上に腰を下ろして、判然としない祈りの文句をつらつらと唱えているようだった。しかしそれはむしろ支離滅裂な魔法の呪文を思わせた。それに近くの山々の小川のせせらぎと風にそよぐ樅もみの木ののざわめきが混じり合って不思議な歌を奏でた。だがウバルドは眠気に負けて、また寢床に倒れこんだ。

樹木の梢の間から曙光が射し込むや、岩屋の主は山間から外に出る道を教えるために、もう騎士の前に立っていた。すっかり元気になったウバルドは馬にまたがり、風変りな案内人は黙ってその横を歩いた。二人はじきに最後の山の頂きに到着した。すると突然、きらきら輝く景色が開けた。はるか眼下に、なんとも華やかな朝の光を浴びた大河や町や城が広がっているのである。男はどうやら自分でも驚いている様子だった。「おお、この世はなんて美しいんだ！」と狼狽して叫ぶと、両手で顔を覆い、そのまま急いで森へ戻って行つた。——見ると、よく知つた道まで来ていたので、ウバルドは頭を振りながら自分の城へと馬を進めた。

しかしウバルドはまたすぐに好奇心を抑えることができなくなって、もう一度あの寂しい土地へ向かった。そして途中少しばかり苦勞はしたもの、再び岩屋を見つけた。岩屋の主は、今回はそれほど不機嫌でも無愛想でもなく、ウルバドを迎えてくれた。

この男が重大な罪を真摯に贖罪しようと願っていることは、すでにあの夜の歌を聴いてウバルドは察知していたが、しかしあのような心情では悪魔と戦つても無意味であるように思われた。男の生活態度には、本当に敬虔な魂を持つ人の明朗な確信のかけらも見当たらなかったし、共に座つて話をしていると、強く抑圧された俗世への憧憬が、その

男の怪しく燃えるような目からぞつとさせるほどの力であふれ出ることもしよつちゅうだったからである。そのたびに男の顔は奇妙なほど粗野になり、別人になってしまったかのようにであった。

これを見て、敬虔な騎士はその曇りのない無垢な心のすべてを傾けて、この自分を偽っている男を抱擁し支えるために、岩屋を何度でも訪れようという気になった。しかし男は自分の名前も過去の行状についてもずっと黙ったままで、きつと過去におびえているのだらうと騎士は思った。けれども訪問する度に男の落ち着きと人に対する信頼は確実に増していった。いやそれどころか、しまいにはこの善良な騎士は、男を自分の城へ連れ出すことにさえ成功したのであった。

二人が城に到着したとき、迎りはすっかり暗くなっていた。それで騎士は暖炉に火をいれて部屋を暖めるように命じ、持っているワインの中で最高のものをふるまった。するとようやく客人の気分もくつろいだようだった。暖炉の火の照り返しを受けてきらきら輝く、壁に掛かっている一本の剣やいろいろな武器にしげしげと見入り、それから再び黙ったまま騎士をじつと見つめたのである。「あなたは幸せな人だ」と男は言った。「そして私は、あなたは愉しげで、がっしりした男らしい人物とお見受けし、畏怖と畏敬の念を抱いております。あなたは喜びや悲しみにとんじやくせずに行動して、この人生を穏やかに操っていらつしやる一方で、どこへ進路を向けるべき定めかをはつきりと知っていて、航海の途中でセイレーンたちの美しい歌にも惑わされることのない船乗りにも匹敵するようなお方に身も心も捧げていらつしやるようだからです。あなたのお側で、私は自分が臆病な愚か者なのではないか、あるいは気の狂った人間なのではないかと何度思ったことでしょう。——この世には人生の酔っ払いという奴がいるのです——ああ恐ろしい、一気に酔いが醒めてしまうかと思うと！」

客人がこのようにいつもとはちがう振る舞いをしたので、騎士はこの機会をみすみす逃す手はないと思い、あなたの身に起こった事をそろそろ打ち明けてくれないかと、もの柔らかい口調で熱心に男を口説いた。男は考え込んでいたが、ついに「私がこれから話すことについて今後一切口外せず、名前もすべて伏せて構わないのでしたら、お話ししましょう」と言った。騎士は男に手を差し出し、嬉々としてその要求を受け入れることを約束した。そして私と妻は共に長いことあなたのお話が聞けるのを心待ちにしておりましたので、一緒に聞かせてやりたいのです。あの者の口の堅さは私が保証します、と言って騎士は妻を部屋に呼び入れた。

騎士の妻は子を一人腕に抱き、もう一人は手を引いて入ってきた。その姿は背が高く美しく、若さの盛りを過ぎて、夕日のように静かで穏やかだった。その沈みゆく美しさを、彼女はいま一度かわいらしい子どもたちに写していた。男は彼女の姿を見るとひどく動揺し、勢いよく窓を引き開けると、しばし夜の闇に包まれた森の彼方に目をやった。気持ちたちが落ち着くと、再び二人の方へ歩み寄り、皆で激しく燃えさかる暖炉の周りに身を寄せて座った。それから男は次のような話を始めた。

私の城の周囲の峡谷をおおう色づいた霧の上に秋の太陽が心地よく暖かに昇りました。音楽が鳴りやみ、宴が終わると、陽気な客人たちは四方八方へと散っていきました。それは、一番好きな幼友達のために私が催した送別の宴でした。この日、友は、大キリスト教軍の約束の地の奪還を手助けするために、数人の仲間を連れて十字軍に合流することになっていたのです。この十字軍遠征こそが、私たちがまだ幼かった頃からのただ一つの願いであり、希望であり、そして目標でしたので。私は今もなお名状しがたい悲哀とともにあの静かな、みずみずしく美しい日々をしきりと思い返してしまうのです。あの頃の私たちは、城内の背の高い菩提樹の下で岩の斜面に共に腰を下ろし、輝かしい

名声を博したゴットフリートと英雄たちが住まい、戦ったかの素晴らしい祝福の国へと進んでいく雲の後を放心した目で追いかけていた——しかしあろうことか、私の全てがいとまたやすく変わってしまったのです！

ああ、うら若きあの女、言いようもないほどの美しい花、私とその女性に会ったのは数度だけなのですが、初めて会った時から抑えきれない愛情を抱いてしまい、——その女は私の思いには気づかなかったと思いますが——彼女は虜になった私をこんな山の静かな牢獄に閉じ込めてしまったのです。もう私は共に戦うことができるほどに強くなっていたのに、その女から離れることができず、友を一人で行かせてしまったのです。

宴にはその女も出席していました。私はとても幸福で、彼女の美しさがきらきらと輝くさまにうっとりとして見とれていました。しかしようやく朝、その女が家路にっこうと馬に乗るのを手伝った時に、私が十字軍遠征を取りやめたのはあなたの為だったのだと思いきって打ち明けました。彼女は何も言いませんでしたが、目を大きく見開き、そして驚いて——私にはそのように見えたのです——私をじつと見つめると、急いでその場を立ち去ったのです。

この言葉を聞き、騎士と妻は見るからに驚きの表情を浮かべて互いに顔を見合わせた。しかし男はそのことに気づかず、話を続けた。

いまや城には誰も残っていませんでした。人気がない部屋に、天井まで伸びるアーチ窓から陽光が射し込み、私の靴音だけがさびしく響いていました。長いこと張り出し窓から外を眺めていると、眼下の静かな森から木を伐採する音がカッーン、カッーンと聞こえてきました。こんな孤独の中にと、言葉では言い表せないほどの切ない感情にとり憑かれてしまいます。私はこれ以上耐えられなくなり、重苦しさをまぎらわすために、馬に飛び乗って狩りに出かけました。

私は長らく山の中をあちこちさまよい、しまいには自分でも驚いたのですが、私がこれまで一度も訪れたことのない場所に入りこんでいました。私は鷹を手に乗せ、夕陽が斜めから射し、軽く撫でていくとても美しい原野を物思いに沈んだまま渡りました。秋の蜘蛛の糸が薄いベールのように澄んだ青空を飛び、渡り鳥たちの別れの歌が空高く、山並みの向こうへと流れ去って行きました。

そのときふと、ホルンの音が聞こえてきました。山から少しばかり離れたところで互いに応答し合っているようでした。そこにいくつかの声の歌をつけました。音楽の調べによって、私の心がこんなにも不思議な憧れで満たされたことはこれまでに一度もなかったので、風がホルンの音の間から運んできた歌詞のいくつかを今でもまだ覚えています。

黄色と赤の縞模様の上空を

鳥たちが渡っていく。

絶望したこの思いはあてどなくさまよう。

ああ！ 安らげる場所が見つからないのです。

そしてホルンの暗い嘆きが

さびしくひたすらあなたの心に訴える。

あなたには見えますか？ 森のかなたに聳える

青々とした山並み、

小川が静かな大地を

音を立てながら速くへ流れていくのが。

雲も、小川も、鳥たちも愛いを知らず

みな共に下へと下っていきます。

私の巻き毛は黄金色に波打ち、

私の若い身体はまだ愛らしくはつらつとしていますー

けれど美しさもまたやがて衰えてしまうことでしょう、

夏の輝きが次第に消えてゆくように。

若い華やかさもそのうちに消えてしまい、

周りのホルンもみな口を閉ざすのです。

抱擁のための細い腕を、

甘い口づけを交わすための赤い唇を、

暖めるための白い胸を、

たくさん、せいっぱいの愛の挨拶を、

ホルンの響きがあなたに伝えているのです、

愛しい人よ！ はやく来て、この響きが止んでしまわぬうちに！

胸を貫くこの調べに、私は気が狂ったようになりました。私の鷹は最初の音が響き渡るやおびえだし、荒々しく金切り声をあげながら空高く舞い上がって姿が見えなくなり、そのまま戻って来ませんでした。しかし私は誘うようなホルンの歌に抗うことができずに、どこまでもその歌についてゆくしかありませんでした。その歌ときたら、遠くから聞こえていたかと思うと、次の瞬間には風に乗って大きく、すぐ近くで聞こえ、私の感覚を狂わせるのでした。

こうしてようやく森から抜け出ると、前方の山に白く輝く城が見えました。城の周囲は山頂から麓の森に至るまで、なんとも見事な庭園が色鮮やかに輝いていました。庭園はさながら城を囲む魔法の指輪のようです。その木々や灌木はみな、他のどこよりも秋に深く色づいて、緋色、黄金色、そして燃えるような赤色に染まっています。終わりゆく夏の最後の星々である、背の高いアスターの花が、さまざまな色調のほのかな輝きの中で燃え立っていました。その美しい高台や城の噴水や窓は、いまや沈みゆく太陽の光を受けてまばゆく輝いていました。

この時になって、さきほどから聞こえていたホルンの音がこの庭から響いていたことに私は気がついたのです。そしてその輝きのまん中、ブドウの蔓の下に私は見たのです——心底びっくりしました——あの女が、片時も忘れたことのないあの女が、ホルンの響きに合わせて自ら歌を口ずさみながら、そぞろ歩いていたのです。彼女は私の姿を認めるや口をつぐんでしまいました。ホルンの音は鳴り続けていました。すると絹の服をまとった美しい少年たちが急いでやってきて、私の馬を引き取ってくれました。

私は上品に金めつきが施された格子門を抜け、庭園のテラスへ飛んでいきました。そこには私の愛する女が立っていました、私はあまりの美しさに圧倒されて、その足元にくずおれてしまいました。彼女は深紅の衣に、秋の蜘蛛の糸のように透けた長いベールをまとい、金色の巻き毛がふわりと垂れて、きらきらと輝く宝石でできた豪華なアスターの花のカチューシャをしていました。

彼女は私をやさしく起こすと、愛と苦悩のせいでしょうか、きれぎれに、感極まったような声で言うのです。「美しく不運なあなた、どうして私はあなたのことを愛してしまったの！ もう随分前からあなたのことを好きだったのです。秋の神秘的な祭典が始まると、毎年私の欲望は新たな、抗しがたい激しさで目覚めるのです。ああ、不運なあなた！ あなたはどうして私のホルンの聞こえるところに入ってきたの？ 私にかまわず逃げてください！」

私はこの言葉に背筋がぞつとして、どうかもっと話を続けてくれ、もっと詳しく説明してくれと懇願しました、しかし彼女は答えてくれませんでした。それから私たちは押し黙ったまま並んで庭園を歩きました。

いつしか辺りは暗くなっていました。とそのとき、愛しい女の身体全体が真剣さと高貴さにつつまれたのです。

「どうか知っておいて」、と彼女は言いました。「今日別れを告げて出発したあなたの幼友達は裏切り者だということ。私は無理矢理に、あの人の婚約者にされてしまったのです。あの人があなたに自分の恋心を隠していたのは、激しい嫉妬心のせい。あの人はパレスチナへ行ったんじゃない、明日私を迎えに来て、人里離れた辺鄙な城に永遠に隠すつもりなのよ。——もうお別れしなくては。あの人が死ぬまで、私たちは二度とお会いすることはないでしょう」

こう言いながら、彼女は私の唇にキスをして暗い小径に姿を消しました。去っていく時、アスターの花を模る宝石の一つが冷たくきらきらと私の眼をくらまし、彼女のキスがぞつとするほどの快楽となって、私の全血管を燃

えるように駆け抜けたのです。

別れ際に彼女が私の健康な血液の中に投げ込んだ毒のようにぞっとする言葉についてよくよく考えると、なんだか恐ろしくなって、頭を抱えたまま寂しい小径を長いことあてもなく歩き回っていました。しまいには疲れてしまつて城門の前の石段に身を投げ出すように横たわり、ホルンの音が鳴り響く中、奇妙な思いにとらわれて眠り込んでしまいました。

目を開けると、朝になっていました。城の扉や窓はどれも固く閉ざされていて、庭園とその周辺一帯は静まりかえっていました。こんなうら寂しい中にいると、愛しい女の姿と昨晚の魔法のようなできごとの一部始終が新たな朝のみずみずしい色彩とともに心の中に蘇ってきて、私は思いを寄せる女から愛されるというこの上もない幸せの感情を味わったのです。確かにあの恐ろしい言葉が頭をよぎると、遠くへ逃げ出してしまいたくなる衝動に襲われることもあったのですが、あのキスがいまだ私の唇の上で燃え上がっていて、そこから離れることができなかったのです。

辺りには暖かく、蒸し暑いくらいの風が吹いていて、もう一度夏に逆戻りするかと思われるほどでした。それで私が近くの森に入り、狩りでもして気分転換をしようと、ぼんやりと歩きまわっていた時のこと、木の梢に一羽の鳥を見つけたのです。その羽ときたらこれまで見たこともないような美しさでした。射落とそうと弓を引き絞ると、鳥はさっと別の木へ飛んで行きました。私は夢中になってその後を追いかけてました。しかしその美しい鳥は私の目の前を梢から梢へ絶えず飛ばたき、その度に淡い黄金色の翼が日の光を浴びて魅惑的にきらきらと輝くのです。

気がつくとい私は小さな谷間にいました。周囲が高い岩壁に囲まれていて、つむじ風ひとつ吹き込んできませんでした。見渡す限り夏のようにいまなお青々としていて、花が咲いていました。そして、とても心地よい歌声が谷の中心

からあふれ出していたのです。驚いた私は、手近なびつしりと茂った木の枝を押し広げました——とたんに眼前で繰り広げられる魔法に目がくらみ、うつとりという気持ちになったのです。

そこには静かな池がありました。それを高い岩壁が円く囲み、岩肌にはおびただしいツタが壁をはいのほり、風変わりなアイリスの花が咲き乱れていました。大勢の少女たちが水に浸って歌いながら、その美しい四肢を満々とした生ぬるい水の中から出したり、沈めたりしていました。そして少女たちを見下ろすように、あの女が一条まとわぬ美しい姿で立っていたのです。他の者たちが歌っているのをよそに、彼女はゆらゆら揺れる水面に映る自分の美しい姿に見入り、夢中になっているかのように、くるぶしの周りで官能的に戯れる波を黙って見つめていました。——私は燃えるような視線を送りながら、長らく根が生えたように立ちつくしていました。すると美しい少女たちが続々と岸に戻りだしたので、見つからないよう、私は急いでその場を立ち去りました。

私は胸を上げしかきむしる炎を鎮めようと、森の木々が最も密生しているところに飛び込みました。しかし遠くへ逃げれば逃げるほど、ますます生々しくさきほどの場面が目にはちらついて、あの若々しい四肢の放つほのかな光がますます熱烈に私をつかまえたのです。

そうこうするうちに、さらに夜気までもが森にいる私を襲ったのです。気がつくとき空の様相は一変して暗くなり、激しい嵐が山々を渡っていました。「あの人が死ぬまで、私たちは二度と会うことはないでしょう!」私は彼女の言葉を絶えず心の中で唱えながら、まるで幽霊にでも追い立てられているかのように駆けだしました。

森の中を走っていると、傍らで馬の蹄のとどろく音を何度か聞いたように思いました。けれどとにかく人と顔を合わせるのがはばかられ、近づいてくる物音がする度に逃げだしたのです。高台にのぼると、たいいてい愛しい女の城が

遠くに見えました。またホルンが昨晚と同じようにうたい、城じゅうの窓から蠟燭の輝きが柔らかな月の光のようにもれだして、周りの木々や花々を摩訶不思議にまろく照らしだしていました。その外側一帯は嵐と闇の中でもみくちやになっているというのに。

私はもうほとんど頭がおかしくなりそうになって、眼下のこうこうと泡しぶきをあげる急流をしり目に、とうとう高い岩壁を登り始めました。岩のてっぺんにたどり着くと、だれと分からね人影が私の目に留まりました。それは石の上に座っていて、まるでそれ自身が石でできているかのようにじっとして、ぴくりとも動かないのです。ちょうどその時雲が散り散りになって流れ、血のように真っ赤な月が一瞬だけ姿を現しました——それで気づいたのです、この人影は私の親友、私の愛しい女の婚約者であると。

友は私の姿を認めるや、すつくと立ちあがり——私は心底ぞつとしてすみあがったのですが——刀に手をかけました。私は怒りに燃えて友に襲いかかると、両腕で押さえ込みました。しばらくの間もみ合っていました。とうとう私は親友を岩壁から深い谷底へと投げ落としてしまったのです。

谷底も辺り一帯も急に静かになりましたが、ただ谷間を流れる川のざわめきだけが前にもまして大きくなりました。さも私のこれまでの人生はこの渦巻く波の下に葬られ、すべてが流れ去って永久に戻ってこないのだと言わんばかりに。

こんなおぞましい場所にはいられぬと、私は大急ぎで立ち去りました。そのとき、大きな不快な笑い声が響き渡った気がして、どうやらそれは背後の木々の梢からのようでした。同時に、頭が混乱していた私は、先ほど追いかけたあの鳥を頭上の枝にまた見たように思いました。——このように追い立てられ、恐怖にさいなまれ、半ば正気を失い

ながら、私は原野を突つ切ると庭園の石垣を乗り越え、あの女のいる城へと駆けて行きました。そして開ざされた門の蝶番を力いっぱい引っぱり、「開けてくれ！」私は夢中になって叫びました。「開けてくれ、無二の親友を殴り殺してきたのだ！ これであなたはこの世でも地獄でも私のものだ！」

すると門扉がさつと開き、あの女が、以前会った時よりもさらに美しくなったあの女が、嵐によつて傷つき、はだけた私の胸に飛び込んで、一心不乱に何度も燃えるようなキスをしてくれたのです。

さあ、これ以上は言わせないでください、部屋の豪華さや、あるいは歌っている美しい女性たちの姿が垣間見える異国の花や木々の芳香のことは、それから光と音楽の洪水や、あるいは愛しい人の腕の中で味わった、あの激しく名状しがたい快樂のことは――

ここで突然、客人が立ち上がった。窓をかすめていく奇妙な歌が聞こえたのである。それはきれぎれにしか聞こえなかったが、風が遠くの山々を越えてこちらへ吹き寄せる度に、時に人の声のように聞こえ、また時にクラリネットの一番高い音のようで、心をわしづかみにしてたちまち過ぎ去っていくような歌だった。――「落ちていてください」と騎士はなだめた。「こんなのはいつものことです。この近くの森には魔法が宿ると言われています、秋の季節になるとこのような音が夜、この城の辺りまでよく聞こえてくるのです。やって来たのと同じくらい、あつという間に去っていきますから、それ以上のことは気にかけないことにしているのですよ」――そう言いつつも、騎士はなんとか抑えていたが、心の中では激しい動揺をきたしているように見えた――歌は確かにもう消えていた。客人は腰を下ろし、ぼんやりと深い物思いにふけていた。長い中断を経て先ほどの落ち着きはないもののようやく気を取り直して、客人は話を続けた。

ふと気づいたのですが、あの女でも、そろそろ秋がすべての野原に別れを告げんとする様子を城から眺めていると、時折知らず知らずに悲しみに見舞われるようでした。しかし一晩ぐっすりと健やかな眠りをとればすべて元通りになつて、翌朝には恋人の美しい顔も、庭園も、あたり一帯もいつも通り元気に、さらに瑞々しく、生まれたてのように私を見つめたのです。

ただ一度だけ、ちやうど私がともに窓辺に立っていたときに、彼女がこれまでよりも無口に悲しげにしていたことがありました。庭園では冬の嵐が落ち葉と戯れていました。すっかり色あせてしまった外の景色を見ながら、彼女がひそかに何度も身震いしていることに私は気づきました。城で働く女たちは全員私たちのもとを去っており、ホルンの奏でる歌はその日ははるか彼方からしか聞こえず、ついにはまったく聞こえなくなりました。愛しい女の目からは輝きがすっかり失せてしまい、今にも消えてしまいそうに見えました。太陽は今まさに山の端にかかり、庭園と周囲の谷をそのあせてゆく輝きで満たしました。すると、彼女が両腕を私に巻きつけ、奇妙な歌をうたい始めたのです。それは彼女の口からこれまで一度も聞いたことがないもので、限りなく物悲しい和音となつて城じゅうに響き渡りました。私がうつとりと聴き入っていると、沈みゆく夕陽もろともゆつくりとこの歌の調べに引きずり込まれていくように、意志に反して目がふさがり、うとうとと眠りに落ちたのです。

目が覚めると夜になっており、城の中はどこも静まりかえっていました。月が皓々と輝き、私の横では恋人が絹の寝床に身体を横たえて眠っていました。私は彼女を眺めてぎょっとしました。彼女が屍のように青白く、巻き毛は風に引きむしられたように、顔や胸のあたりにかかっていたのです。その他の周囲のものは、私が寝入ったときと変わらずそのまゝの状態でしたが、もう長い時間が過ぎてしまったかのように見えました。——私は開け放したままの窓に

近づきました。外の景色はすっかり変わり果て、日頃見ていたのとは全く違っているように思われました。木々は奇妙な音を立てていました。その時、城壁の所に男が二人立っているのが見えました。二人は向かい合つてなにやら話をしながら前屈みになったり身体を折り曲げたり、ずっと単調な動きをしていて、まるで機械ばなでもしているかのようでした。二人が何を話しているのかは理解できませんでしたが、ただ、一度ならず私の名前が出ているのは聞こえていました。——私はもう一度振り返つて、ちょうど月にくつきりと照らし出された恋人の寝姿を眺めると、石でできた像を見ているような気分になりました。美しいけれども、死人のようにまったく動かない。彼女の硬直した胸の上で寶石がバジリスクの眼のように輝きを放ち、彼女の口は奇妙に歪んでいるように私には見えたのです。

そのとき急に、これまで一度も感じたことのないようなひどい恐怖に襲われました。私は何も持たずに、一切の輝きの消えうせた、人気がない寂しい広間を抜けて一目散に逃げ出しました。城から出た時、少し離れたところにいる先ほどの面識のない二人の男が仕事の最中に突然硬直して、立像のように動かなくなるのを目にしました。脇のはるか山裾に目を落とすと、さびしい池のほとりに、雪のように白い服を着た幾人かの少女たちがいました。少女たちはこの上なく上手に歌をうたいながら、野原でせつせと奇妙な織物を広げ、月の光で漂泊しようとしているようでした。こんな光景を目にし、こんな歌を聞いたせいで、私はますます激しい恐怖に襲われたのです。それでなおさら私は急いで庭園の石垣を飛び越えました。雲は飛ぶような早さで空を流れて、木々は私の背に向かってこうこうと唸りをあげ、私は息を切らしながらひたすら走り続けました。

夜は次第に静かに、そして暖かくなってきました。ナイチンゲールが茂みの中で鳴きました。はるか遠くの山の麓で声が行き交うのが聞こえ、すると、なんとも美しい春の朝が目の前の山並をぼんやりと染めあげていくにつれ、

この燃え尽きた心の内にうすぼんやりと長いこと忘れていた古い記憶が蘇ってきたのでした。——これは何だ？
いったい私はどこにいるんだ？ 私はびつくりして大声をあげました。自分がどうなっているのか分かりませんでした。
た。秋と冬が過ぎ去って、また春になっている。ああ、なんとということだ！ こんなにも長い間、私はどこにいたのだ？

そうして私はとうとう最後の山の頂上にたどり着きました。すると太陽がきらびやかに昇ってきました。幸福な振動が大地をかすめ、河と城がきらりと光りました。人々は、ああ！ 穏やかにそして楽しげに、かつてと同じように日々の仕事に勤しんでいました。数え切れないほど多くの雲雀が空の^{ひばり}高いところでさえずっています。私はくずおれるようにひざまずき、失ってしまった我が人生を偲んで号泣しました。

こういった全てのことがどのように起こったのか、私には理解できませんでしたが、そしていまだに理解できないままです。ですが、このように罪と抑えきれぬ欲望を胸いっぱい抱いたままでは、まだあの朗らかで無垢な世界へ下りて行く気にはならなかったのです。人の住まない奥地に隠れて私は天に罪の許しを請い、自分のあらゆる過ちを、昔からいやというほどはつきりと自覚しているただ一つの過ちを、熱い後悔の涙で洗い清めてしまわない限りは、人里に戻るつもりはありませんでした。

あなたが岩屋で私と会ったのは、そのような生活を始めて一年が経った頃でした。その頃熱心な祈りがしきりと私のおびえた心の中から湧きあがっていました。それで時々錯覚したのです、私はやり遂げて、神の寵愛を得たのだと。しかし、それはごくたまに訪れる一瞬間のきわめて幸福な錯覚にすぎず、全てはまたあつという間に消え去ってしまいました。そしていま再び、秋がその素晴らしい色彩豊かな網を広げて山や谷をおおい、また森からあのなじみの調

べが私の孤独の中にきれぎれに漂つてくると、私の内なる暗い声がそれに反響し、応答するのです。速くの大聖堂の鐘の音が、日曜日の朝に、山々を越えてこちらまで聞こえてくる度に、それはまるで私の心の中にはもはや存在していない子ども時代の古い静かな神の国を探し求めているかのようで、私は相も変わらず、心底ぞつとするのです。——ほら、誰もが心に描く、不可思議な暗い想像の国ですよ。その深みでは水晶やルビーや石になったあらゆる花が、ぞつとするほど色づき目つきで上へとまたたきを放っていて、その間を魔法の響きが漂い流れていく。それがどこから来て、どこへ行くのか、おまえには分からない。俗世の営みの美しさがほのかな光を放ちながらわが身に迫り、目に見えない泉が、もの悲しげに誘惑するようにしきりと音を立てる。そしてそれがおまえをどこまでも下へと引っ張るのだ、下へと！

「かわいそうなライムント！」とそのとき、騎士は大声を出した。話を続けるうちに夢見るように我を失った客人を、騎士は感に堪えないという面持ちでそれまでずっと見つめていたのである。

「私の名前を知っているとは、いったいあなたは誰だ！」と客人は大声で叫ぶと、雷に撃たれたように呆然としていた。

「まさかこんなことが！」騎士はそう言う、身体を震わせている客人を、愛情をこめてその腕に抱きしめた。「君は僕たちのことがもう全く分からないのかい？　僕は君の昔ながらの忠実な戦友のウバルドだよ、そしてここにいるのが、君が密かに愛し、君の城での送別の宴が終わった後、君が馬に乗せてあげたベルタだよ。それ以後、時間の経過と波乱に富んだ生活のせいで、お互い若かりし頃の生き生きとした面影はすっかりはやけてしまったが、君が話を始めた時に、ようやく、君だと分かったよ。だが僕は君が話したような場所には一度も行ったことがないし、君と岩

の上で戦ったことも一度もないぞ。僕はあの宴の後すぐパレスチナへ行き、数年のあいだ戦いに加わっていたんだ。そして帰国後、ここにいる美しいベルタは僕の妻になった。ベルタもあの宴の後、君には一度も会っていない。だから君が今話してくれたことは、すべて空想にすぎないんだよ。——なんて邪悪な魔法だ、秋が来る度に新たに目覚めては、また君とともに沈み、かわいそうなライムント、君は長い年月、秋の見える偽りの戯れにまるめ込まれていたんだね。君は人里から離れて、数日間を過ごすように何ヶ月もの時を過ごしていたんだ。僕が約束の地から戻ってきた時には、君がどこに行ったのか誰も知らなかった、それで僕たちは、君がとつくの昔に失われたと思って「いたんだ」ウバルドはうれしさのあまり、自分がひとこと言う度に、友が震えを激しくさせていくことに気づかなかった。友は落ちくぼんだ目をじつと見開いて、二人を交互に見つめた。すると不意に、二人がかつての親友と思いを寄せていた女であることがはつきりと蘇ってきた。暖炉の炎がちらちらと戯れるように、とうに盛りを過ぎた二人の切ない姿を照らしていた。

「失われてしまった、何もかもが失われてしまった！」とライムントは胸の奥から絞り出すように叫ぶと、ウバルドの腕を振り切り、矢のような速さで城から夜の森へ飛び出していった。

「そうだ、失われてしまったんだ、ああ、私の恋も私の人生の一切も、長年にわたる錯覚だったとは！」ライムントは絶えず独り言をつぶやきながら、ウバルドの城の明かりがひとつ残らず見えなくなってしまうまで走り続けた。ほとんど無意識のうちに、彼は自分の城に向かって歩を進め、ちょうど朝日が昇る頃、到着したのだった。

はるか昔に城を離れた時と同じ秋晴れの朝で、突如、当時の想い出とともに失ってしまった青春時代の栄光と名声が痛みとなって、ライムントの心にのしかかってきた。石畳みの城の中庭にある背の高い菩提樹の木々はいまもお

風にざわめいていたが、広場にも城のどこにも人の姿はなく、荒涼としていて、風がそこかしこの朽ち果てたアーチ窓を吹き抜けていた。

庭に入ると、そこもまたすっかり荒れ果て、雑然としていた。しかし色づいた草の中で遅咲きの花が、あちらこちらでぼつりぼつりとほのかな輝きを放っていた。高く伸びた花の先には一羽の鳥がとまり、素晴らしい歌をうたっていた。その歌を聴いていると心は限りない憧れで満たされたのだった。それは、昨晚ウバルドの城で話をしている最中に、窓をかすめていったのと同じものだった。しかもライムントは今、その美しい黄金色の鳥が魔法の森にいた鳥であることに気づいてはつとした。——だがそれより、歌っている鳥の背後で、城のアーチ窓からこちらを見下ろす背の高い男がいた。静かに、青ざめ、血しぶきを浴びて。それはまぎれもなくウバルドその人の姿だった。

ライムントはぎよつとして、その静まりかえった光景から顔をそらし、前方の澄みきった朝の風景に目を落とした。とその時やにわに、眼下をあめしいまやかしの乙女がほほ笑みながら、むっちりとした若い盛りの姿で駿馬に乗って駆け抜けていった。彼女の背後から銀色の蜘蛛の糸が追いかけるように舞い飛び、額のアスターの花が、緑がかった金色の光を長いこと原野一帯に放っていた。

すっかり狂ってしまったライムントは、乙女の後を追って庭を飛び出していった。

鳥の不思議な歌は、ライムントの一足先ですつと響いていた。先に進むにつれ、この歌は奇妙なことに、いつか彼を誘ったかつての古いホルンの歌へと変わっていった。

「私の巻き毛は黄金色に波打ち、

私の若い身体はまだ愛らしくはつらつとしています——」

ぼつりぼつりと、きれきれに、またあの歌が遠くから鳴り響いてきた。

「小川が静かな大地を

音を立てながら遠くへ流れていきます」

城が、山々が、そして世界の一切が背後でぼうつとかすんで没した。

「たくさんの、せいっぱいの愛のあいさつを、

ホルンの響きがあなたに伝えているのです。

ああ、どうぞ来てください、ホルンの響きが止んでしまわぬうちに——」

それはこだまする——そして哀れなライムントは気がふれ、その響きを追って森に入っていく、もう二度とその姿を現すことはなかった。

【出典】 (Hrsg.) Wolfgang Frühwald, Brigitte Schillbach u. Harwig Schulz: Joseph von Eichendorff Werke Band 2. (Deutscher Klassik Verlag). 1985, S.9-S.27.